

文=五月女善重
(五月女総合プロダクト)

僕がトツ。ブダウンだつた頃

腹を据え、父親のパチンコ店を引き継いだ僕は「なにごともすべて自分でやらねば！」という使命に燃え、睡眠時間が三十分という日さえありました。

指揮を取り、「右だ！ 左だ！」と声を張り上げ、少しでも社員の行動が理想から外れると、「なんで出来ないんだっ！」と、むやみに怒鳴り散らしていました。

『こんなに熱い思いを伝えているのに、なぜみんな分かつてくれないので？』

携帯電話で社員を叱咤するところを偶然友人に目撃され「鬼の形相だった。仕事になると顔つきが変わるんだね」と言わされた事もあります。プライベートでは「ダンディ」と揶揄されるほど物静かな僕でしたから、ギヤップに驚かれたようでした。そんな働き方がたたつたのでしょうか、ついに体を壊し、しばらくの療養が必要となりました。

『早く現場に戻り、指示をしなければ』。
はやる心で店舗に戻った僕は、その状況に目を見張りました。僕の不在中に社員たちが手分けをして、数々の仕事を遂行していました。それも、むしろ僕が手掛けるよりもいい仕上がりなのです。

途端に、僕をがんじがらめにしていた重たい鎖がバラバラツ、と落ちるのを感じました。

から気づかされました。権限委譲を始めてみると、ストレスが軽減され、組織もスムーズに動くようになります。「人が育つ」というのはこういうことか、と体感したのです。不思議なことに、僕が権勢を振るい、「言うことを聞け」と上から押さえつけていた時のほうが、自身に降りかかる心理的負担も大きかったです。

しかし、トップダウンだった時期を後悔しているわけではありません。すべてはとことん突っ走った結果から得たものです。若いうちはいくらでも後戻りができます。たとえそれが「べき論」だと周囲に忌み嫌われても、一度は自分の思うままに行動するのもよいのではないか

僕たち二代目は、試行錯誤しながらも前に進む。それが大事なのだと思います。

AJ



さおとめ・よしげ

五月女総合プロダクト株式会社代表取締役社長。大学卒業後、父親の営む建築資材会社を経て、26歳でホール業界に。針調整など現場仕事を経験する中で「自分の代になる」という強い意思のもと、2000年に屋号をライブガーデンに変更。2003年代表取締役就任。「スタッフが主役の会社づくり」を掲げ、栃木県南部を中心現在8店舗を経営。1965年生まれ。

思い通りに人か動かないストレスがジレンマとなつて僕を襲います。その鬱憤を晴らすかのように、さらに怒号を飛ばす。社員を叱責した後の、泥のような自己嫌悪。行き場のない悲憤を吐き出すよ

己嫌悪。行き場のない悲憤を吐き出すよう、また怒鳴るという、おそろしい負のループに陥っていました。

「ああ、『自分』じ

ダメだ！」と目を吊り上げていた仕事も、実際は「自分じやなきやダメな仕事は、無かつた」ので